

古代山城からみる古代道路の関係とその視認性

中原 彰久

古代山城は、「神籠石論争」を発端に研究が進み、城郭論が定説となった。既往研究では土器の出現時期と出土量などの出土物や山城自体の構造である石塁や城門に着目してきた。

私は、今回の研究で古代山城と古代道路の関係性に着目した。車路と呼ばれる延喜式駅路よりも以前の道路の出現から道路位置と周囲の自然地形を意識した配置であると考えた。

そこで、大宰府を中心として古代道路を現在の高速道路のような「のぼり」「くだり」を意識して各古代山城に当てはめることとした。さらに、唐・新羅軍の進行を想定し、視認性について考慮した。

古代山城が、古代道路からの視認性を意識しているか否かを仮定し、四つに分類することができた。

分類①は、古代道路からの視認性を意識して選地した古代山城として「鞠智城（のぼり・くだり）」、「基肆城（くだり）」、「鹿毛馬神籠石（のぼり・くだり）」などを分類した。進行方向上に古代山城を視認することができずその方向をみて初めて視認できる場合、また古代山城の前面に広がる山や丘により視認が遮られる場合とした。

分類②は、古代道路からの視認性をやや意識して選地した古代山城として、「女山神籠石（くだり）」、「杷木神籠石（のぼり）」などを分類した。近接して初めて視認できるものが多く、丘陵や山を越えないと視認できない。

分類③は、古代道路からの視認性をわずかに意識して選地した古代山城として「杷木神籠石（くだり）」、「女山神籠石（のぼり）」などを分類した。ある程度距離がある場所からでも全体像を把握することができる。また、河川などによる障害物が近接している。

分類④は、古代道路からの視認性を意識せずに選地した古代山城として、「おつぼ山神籠石（のぼり）」などを分類した。部分的ではなく全体像を把握することができる。

以上のことから、古代山城は、のぼり路線とくだり路線からの見え方を意識して、選地していたと考えた。このうち、鞠智城は、のぼりくだり両線から烽火のようなものなどは確認できたと考えられるが、古代山城を構成する列石など古代山城本体を判別するのは難しく、鞠智城に近

接するほど全体像がつかめなくなるという性格がある。

このようなことから古代山城は、防衛方向を想定して築造していたのではないかと指摘できた。